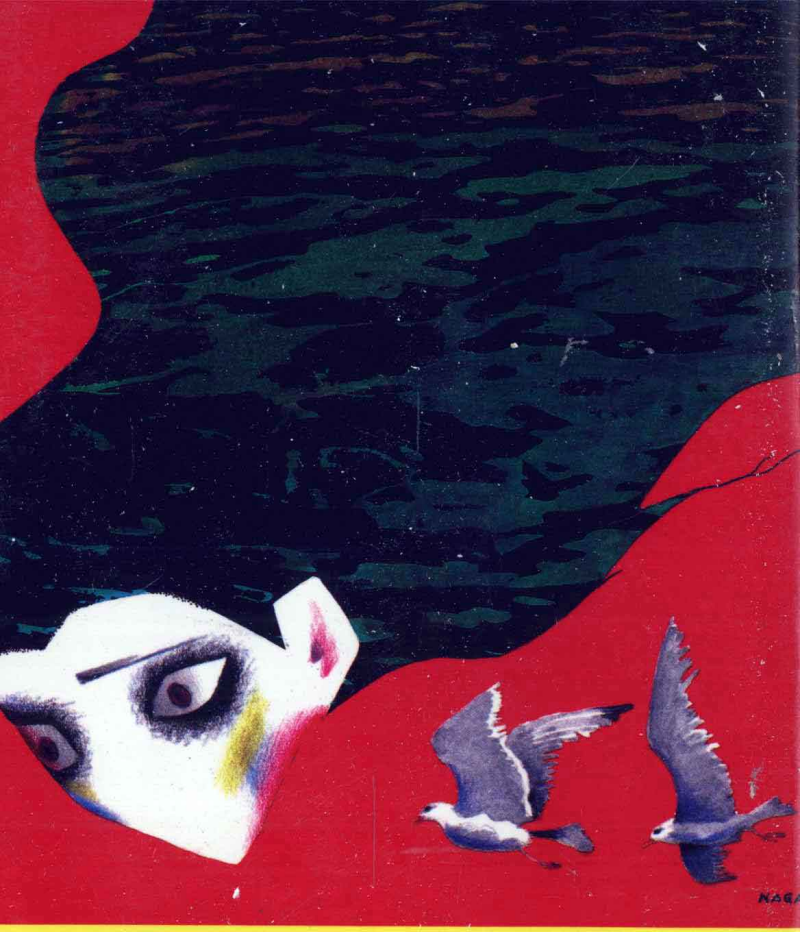

長編推理小説

自殺行き往復キップ

赤川次郎

自殺行き往復キップ

定価六八〇円

昭和57年10月20日　初版発行
昭和57年12月1日　86版発行
検印廃止

著者　赤川次郎
発行者　村川修二郎
発行所　主婦と生活社
〒104 東京都中央区京橋三丁目五番七号
TEL 販売部(五六二)二六五一
編集部(二七二)一五三〇
振替東京〇一三六三六四

印刷所　太陽印刷工業株式会社
製本所　株式会社若林製本工場

© Jiro Akagawa, 1982 Printed in Japan
(落丁・乱丁本は、お取替えいたします)

長編推理小説

自殺行き往復キップ

赤川次郎

主婦と生活社

カバー・本文イラスト　長尾みのる

自殺行き往復キップ●目次

第一章●断崖の恋人たち……5
第二章●やさしい殺人者……31
第三章●見知らぬ者の再会……57
第四章●殺意への招待……83
第五章●野望の計画書……109
第六章●密告者の葬送……135
第七章●死を賭けた遊戯……161
第八章●悪魔はやさしく微笑む……187
第九章●暗い海の秘密……213
第十章●葬られた愛……239

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

第一章　断崖の恋人たち

1

真鍋志津子は、あと五分で三時になるというのに、まだ出かけていいものかどうか、決めかねていた。

実の所、選ぶ余地はなかった。今日の婦人会では、志津子が発言の順番に当っており、欠席するわけにいかなかったからだ。それでも志津子をためらわせているのは、母親としての第六感とでもいったものだったかもしれない。

あんなに反抗的だった今日子が、二、三日前から急に素直に、おとなしくなって、父や母へ愛想よくすらなっていたのが、志津子にはどうも引っかかってならないのだ。——そんなに急に、手のひらを返すように変るものだろうか？

志津子は思わず苦笑した。

このひと月余り、志津子は一人娘の今日子と毎晩のように口論をくり返して来た。たまに父親が早く帰宅した時は父も加わって、実際後になると志津子自身、今日子が可哀そうになるほどに、両親二人して娘を叱りつけたのだ。

しかし、口論の最中には、そんな同情心を起こす余裕などない。いつも最初は、今日こそ冷静に話をしようと決心して始めるのだが、十九歳の今日子にそれを求めるのは無理な話で、恋人のことを少しでも悪しざまに言われようものなら、目に涙を浮かべて食ってかかる。

そうなると志津子も娘を黙らせようと、つい声が高くなり、感情も昂ぶって、いつしか二人の話し合いは激しい言い合い、ののしり合いにへとエスカレートして行くのだ……。

今日子も辛いだろうが、志津子とてそんな「日課」を楽しんでいたわけではない。一日も早く終ってくれれば……。そう祈っていたのである。

そして今、それが現実になってみると、今度は不安で仕方ない。ずいぶん勝手なものだわ、と志津子は苦笑いしたのであった。

——三時を過ぎていた。もう出かけなくては。仕度は終えている。後はハンドバッグを手に玄関を出るだけだ。

居間のソファから立ち上がると、志津子は一応今日子の部屋を覗いて行こうと思った。大学は休講だと言って、遅い朝食——といっても志津子の昼と一緒だった——を食べに階下へ下りて来て、また自分の部屋へ戻ってそれきりである。

階段を上って、取っつきが今日子の部屋だ。

「——今日子」

と志津子は呼びかけた。——答えがない。

「今日子、お母さん、出かけて来るけど……今日子?」

ふっと、いやな予感がした。いないはずはない。それなのに……。

まさか! 首でも吊って——。

「今日子!」

切迫した声を上げて、ドアを開け、中へ入ると——ベッドに寝転がっていた今日子が、何事かという顔で起き上がった。志津子は胸を撫で下ろし、今日子がヘッドホンを外すのを眺めて苦笑いした。ヘッドホンからは、これだけ離れていても、ロックだか何だかが鳴っているのが聞こえて来る。これでは呼ぶ声など聞こえるはずもない。

「どうしたの、お母さん?」

今日子は不思議そうに、「えらく怖い顔して入って来たわよ」

「何でもないわ。——婦人会の集りで出かけて来るわね」

「ああ、昨日そんなこと言ってたっけね。いいわよ、どうぞ」

口のきき方はぞんざいだが、それはもともとのことだ。しかし、そこには、つい三日前までの敵意は感じられない。——志津子は、ジーパンにセーター姿でベッドに横になって雑誌をめくっている娘の姿を見ている内に、ついさっきまで心の底にくすぶっていた疑念が消えて行くのを感じた。

何も心配することはないんだわ。何といっても、この子は私の娘なんだもの……。

「出かけないの?」

と今日子が母の顔を見る。

「い、いえね……。じゃ、行って来るわ。帰りは夜になると思うけど」

「お腹空いたら適当に食べるわ」
「そう。——出来るだけ早く帰るわ」
「はい」
と、もう無関心な様子で雑誌を眺めている。志津子は部屋を出てドアを閉じかけたが、
「——今日子」
「何なの？」
「あなた……もう大丈夫なの？」
「大丈夫、って……木村君のこと？」
志津子は黙って肯いた。
「もう言わないで」
今日子は突き放すような口調で言った。「もう終ったんだから、彼とは」
そしてまた雑誌へ目を戻してしまう。
志津子はそれ以上言うことも思い付かなかった。ドアを閉じ、階段を下りながら、ホッとため息をついた。長い長い、重苦しい日々がやっと終ったのだ。
今日子を手の中へ取り戻したという安心感と共に、今日子への哀れみの気持が起って来た。——あれほど愛していると絶叫し、結婚させてくれなければ死ぬとまで言った恋を失うのは、いかに現代っ子の今日子でも、苦しい試練だったに違いない。二人の間に何があったのか、何が語られたのかは分らないが、それは訊かずにおこう。
ともかく今日子は戻って来たのだ。それで充分だ。志津子は、婦人会が終らなくても、夕食の仕度には間に合うように帰ろう、と思った。

今日子は、母親が玄関を出て、通りでタクシーを拾って乗り込むまで、窓辺に立ってじっと見守っていたが、タクシーが走り去ってしまうと行動を開始した。
ベッドの下からスーツケースを引張り出す。もう着替えの類は詰めてあった。後は小物類、それに久夫からの手紙の束をスーツケースのポケットへ押し込む。
時間はまだ充分にあったが、こうしてせき立てられるように動き回っていないと、何となく不安だった。決心が鈍るような気がしたのだ。——駈け落ち。久夫にそう言われた時は、何だか少しも現実のように思えず、ポカンとしていた。

「駈け落ちって……」
「分るだろう？　二人で家を出るのさ」
「出るっていっても……。どうやって？」
久夫は笑って、
「どうやるも何もないよ。荷物をまとめて、出て来ればいいのさ。見付からないようにね」
「夜中に？」
「何も夜じゃなくたって、君の両親がいない時ならいつでもいいさ。お父さんは昼は会社だろう？　お母さんもよく出かける、って言ってたじゃないか」
「ええ……。水曜日は婦人会の集りがあって出かけるわ。三時から」
「じゃ、絶好の機会だ。二人で遠くへ行って新しい生活を始めようよ」
二人で……新しい生活を始める……。今日子は、まるで難しい英文を聞かされた時のように、何度もその言葉を胸の中でくり返した。
スーツケースを手に、今日子は部屋を出た。一番地味な、紺のセーターに黒のパンタロンという服装だ。まずこれなら二十二、三歳に見えるだろうと思っていた。
階段を下り切った時、
「いけない！」
と呟いた。肝心の物を忘れて来た。スーツケースをそこへ置いて、慌てて二階へ戻る。机の引出しから、書き置きの封筒を取り出した。ゆうべ一晩かけて書いたものだ。念のために、今日子は中の手紙を取り出してもう一度目を通した。
〈お父さん、お母さん。ごめんなさい。こんな風にさよならは言いたくなかったけど、他に仕方がないんです。みんながどう言おうと、久夫さんを私は愛しています。一緒になることもできず、会うことも禁じられたら、生きていても意味がありません。私たち、話し合った末、二人で死のうと決めました。二人きりで旅行をして、旅先で死ぬつもりです。誰も恨んだりしません。二人で死ねたら幸せですから。さようなら。　今日子〉
「死ぬ？」
今日子は驚いて久夫の顔を見つめたものだ。
「そう書くだけさ。本当に死のうってわけじゃないよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

久夫は事もなげに言った。——今日子はさすがにしばらく迷った。
「だって……それじゃお母さんたちが本気で心配するじゃないの。ただ出て行くだけでいけないの？」
「カムフラージュさ！　分らないのかい？　家出したってすぐに見付かって連れ戻されちまう。よほど巧くやらなけりゃ。だから、心中するふりをするんだ」
「ふりをする？」
「死んだと思わせるのさ。そうすりゃ諦めて捜そうとしない」
今日子は、それでもしばらく迷っていた。両親にとって、自分は一人娘だ。その娘が死んでしまったら、二人はどんなに悲しむだろうか。——それを考えると、容易には久夫に賛成することができなかった。
しかし、結局は、
「二人でちゃんと生活できるようになったら、両親に生きてることを知らせてやりゃいいじゃないか」
という久夫の言葉に肯いたのだった。ほんの半年か一年もすれば、二人で立派に暮して行けるようになる……。

今日子は手紙を封筒へ入れると、それを手に急いで階段を下りて来た。
「あら、今日子ちゃん、お母さんは？」
玄関が開いていて、隣の関山家の夫人が立っていた。今日子は一瞬立ちすくんだ。スーツケースが玄関の上がり口に置きっ放しだ。
「お母さんいらっしゃる？」
重ねて訊かれて、今日子は慌てて言った。
「出かけてますけど。あの——婦人会の会合で——」
「あら、そうだったわね。今日は水曜日か」
「ええ」
「じゃ、また来るわね」
関山夫人はそう言いながら、チラリとスーツケースへ目を向けて、「旅行なの？」
「え、ええ……ちょっと」
「そう。お母さん、そんなことおっしゃってなかったけど」
「旅行っていうほどじゃないんです」
「そうなの。——また、ずいぶん今日は地味な格好ねえ」

そんなことどうだっていいじゃないの！　今日子はそう叫びたい気持を必死に抑えつけなければならなかった。

――黙って立っていると、相手は、

「さて、と……。じゃ、またね」

と言いながら、名残り惜しそうに周囲を見回した。何か目新しいものはないか、という目付きである。

「気を付けて行ってらっしゃい」

「ありがとう」

やっとの思いで、今日子は言葉を押し出した。玄関のドアが閉まると、大きく息をついて、それから急いで居間へ入った。書き置きをテーブルの中央に置き、ちょっとの間、それを見つめて立っていたが、ゆっくりしてはいられないのだ、と自分に言い聞かせる。

次は一番気の進まない仕事だった。廊下の奥の和室へ入ると、戸棚から手提金庫を取り出し、番号を合わせて開けた。手が震える。金を盗むのだ。――盗む。まさか、自分がいつかこんな真似をするようになろうとは、夢にも思わなかった……。

現金が三十万円ほどあった。

「――ともかく、あるだけの金を全部持って来ればいいのさ」

久夫は当り前のような口調で言った。

「でも……それじゃ泥棒じゃないの」

「馬鹿だなあ。親の金だぜ。何も金に困ってる人間から盗もうってんじゃない。どうせ銀行にはどっさり貯金があるんだろう」

「それはそうだけど……」

「いいかい、金がなきゃ遠くへ逃げるわけにもいかないんだ。それに二人でアパートを借りようと思えば、すぐ四、五十万の金は必要なんだ。――仕方ないじゃないか」

二人でアパートを借りる。二人きりの部屋……。今日子はためらいを捨てて肯いた。

金を自分のバッグへ押し込むと、今日子は手提金庫を元の場所へ戻そうとして、

「――そうだ」

と思い出した。もし金庫にキャッシュカードがあったら持って来いよと言われていたのだ。金庫をもう一度開けると、中を探った。――あった。今日子はそれを一緒

にバッグへ入れた。
玄関に立って、もう忘れたことはなかったかしら、と考え直す。——大丈夫。
スーツケースを手に、今日子は家を出た。もう二度とこの家へ帰って来られないかもしれない。しかし、そんな感傷に浸っている暇はないのだ。
今日子は急いで歩いて行った。振り返ろうともしなかった。やがて三時半になろうとしている……。

2

「やあ」
木村久夫は立ち上がりながら言った。「来ないかと思った」
喫茶店へ入って行った今日子は、久夫の言葉を聞いていなかった。呆気に取られて、彼のスタイルを眺めていたのだ。
「おいおい、何て顔してるんだよ」
と久夫は笑って、「さあ、座って。まるで幽霊でも見たような顔してるぜ」
「だって……」
こんな時なのに、今日子は笑い出してしまうのを止めることができなかった。「どうしたの、その格好?」
「似合うだろ、なかなか? ちゃんと床屋に行って髪も切って来たんだ」
いつも、Tシャツにジーパンというスタイルの久夫が、パリッとした背広の上下に身を包んでいるのだ。ネクタイもゆがんでいないし、短く切った髪も、きちんと油をつけてクシを当ててある。どう見ても二十五、六のビジネスマンだ。
「びっくりしたあ!」
今日子は首を振った。「結構さまになってるじゃないの。二十一にはとっても見えないわよ」
「ありがとう、中味がいいからね。——あ、何か頼めよ」
今日子は、ウエイトレスへ、
「ホット下さい」
と注文しておいて、息をついた。「これなら、私たち、若夫婦に見えるかしら?」

「ああ、バッチリだ」
そう言って久夫はポケットから小さな包みを取り出すと、「夫婦なら、こいつがなくちゃね」
「何なの？」
久夫が包みを開いて、それを差し出した時、今日子は胸が震えた。言われてみれば当り前の、けれど今日子は考えもしなかった——指環だった。
「はめてやるよ。手を貸しなよ」
と久夫が言った。今日子は彼の手に左手をあずけ、その薬指にリングをはめられた時、思わず目から涙が溢れて、慌てて右手の甲で拭った。少しリングは緩かったけれど、彼女の左手で、それは光を放つように見えた。
「た、高かったでしょ？」
自分でも分らない内に、つまらないことを訊いている。
「いや、安物なんだよ。その内、もっといいやつを買ってやるからね。しばらくそいつで我慢しててくれ」
「ええ」
今日子は、ハンサムな久夫の、優しい目にじっと見入った。——私はこの人について行くんだ。一生、離れない。
「お金、いくらか持って来たかい？」
と久夫が訊いた。
「ええ。三十万くらい。はっきり数えてないけど」
と今日子がバッグから金を出そうとすると、久夫は、
「君が持ってろよ。家計は奥さんの領分だろ」
と言ってニヤリとした。今日子は無性に照れくさくて、赤くなった。
「キャッシュカードもあったから持って来たわ」
「そうか。そいつは助かるな」
「各銀行共通のよ。——でも、どうするの？　お金がなくなったらおろすの？」
「そんなことしたらたちまち見付かっちまうさ。君がこれを持ち出したと分る前に使わなきゃ。貸してみろよ。——この近くに自動支払コーナーがある。五時まで開いてるからな。まだ大丈夫だ」
「いくらおろすの？」
「さあ……。ま、適当にやるよ。任しとけって」
「いいわ」

「暗証番号は？」
「８２２９。電話番号と同じよ」
「そういう奴が多いんだ。だから盗まれるとすぐ利用されちまうのさ」
と久夫は言って、「ま、人のことは言えないけどな。——じゃ、ここで待ってろよ。すぐ戻って来る」
「分ったわ」
今日子は、店を出て行く久夫の後ろ姿を見送ってから、コーヒーをゆっくりと飲んだ。初めて、心の安らぎを覚えた。——両親のことを考えると、心が痛まぬではなかったが、自分が幸せになることが、その罪滅ぼしなのだと自分に言い聞かせていた……。
三十分ほどして、久夫は戻って来た。
「遅かったのね」
「混んでてね、ちょうど。散々待たされたよ」
「いくらおろして来たの？」
「十万円さ」
「それぐらいでいいの？」
「あんまりおろしちゃ泥棒と同じことになると思ってね。ゼロから出発するんだ。二人の力でね」
今日子は微笑んだ。久夫は腕時計を見て、
「さ、列車の時間だ。行こうぜ」
「ええ」
「スーツケース、持つよ」
「あなたのは？」
「僕は何もないよ」
「何も？」
「ゼロから出発さ」
と言ってウインクして見せる。「さて、行きましょうか、奥さま」

「泣いたって始まらないよ」
真鍋は苛々した口調で言った。
「だって……私が……出かけずにいれば……」
としゃくり上げる志津子を遮って、
「その時は次の機会にのびるだけさ。その気になれば出て行くのは簡単だ。止めることはできなかったさ」
「でも……あの子は死ぬって……」

「そう書いているだけさ。死にやしない」
「あなたったら、そんな呑気なことを！」
志津子は少しヒステリックに言った。
「落ち着くんだ！　どういう手を打てばいいかを考えなくては……」
「新聞に広告を出しましょう。何もかも許すからといって……」
真鍋は額に深くしわを寄せた。
「それも一つの方法には違いないが……解決にはならん」
「解決なんて！　それは今日子が帰って来てからのことじゃありませんか！」
真鍋は居間のソファに腰をおろした。そしてしばらく今日子の置き手紙を見ていたが、ふと思い付いたように訊いた。
「今日子はどれくらい金を持って行ったんだ？」
「さあ……。二、三十万だと思いますけど」
「他に何か金になるような物は？」
「よく分りませんけど……」
「キャッシュカードはどうだ？」
「――そう言えば、見当りませんでしたけど……」
「銀行へ問い合せてみよう」
「もう七時ですよ」
「あの支店長はよく知ってる。大丈夫、調べてくれるさ」
真鍋は銀行へ電話をかけると、支店長を呼び出した。
「――ああ、真鍋ですがね。――いや、ちょっと口座の残額を調べてほしいんでね。――今日、引出していると思うんだが」
四、五分の間、真鍋はじっと身じろぎもせずに待っていた。
「ああ、どうも。――うん。――そうか、ありがとう。――いや、いいんだ。何でもない」
「どうでしたの？」
と志津子が訊いた。
「やはり預金をおろしているよ」
「いくらぐらい？」
「三百万だそうだ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong